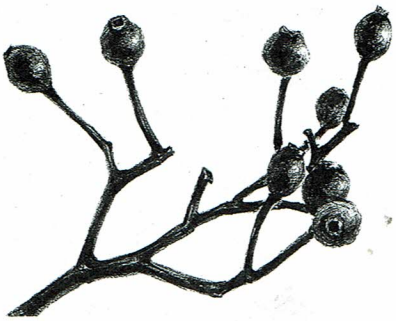
朝日 俳壇 歌壇



〈ノイバラⅡ〉　日高理恵子

うたをよむ　正岡子規の艶俳句

俳人の夏井いつきさんと俳優で映画監督の奥田瑛二さんの共著「よもだ俳人子規の艶」（朝日新書）が刊行された。「よもだ」とは伊予（愛媛県）の言葉で「反骨の精神をおとぼけのオブラートでつつんだような気質」という意味だ。

奥田さんは、瀬戸内寂聴さんからもらった「寂明」という俳号を持つ。正岡子規が詠んだ傾城（遊女）や遊里を題材にした一群の作品を「艶俳句」と名付け、夏井さんと語り合った。

〈傾城の菫は痩せて鉢の中〉。夏井さんが「頭で想像するだけでは決して出てこない」と解説。奥田さんもこう話す。「遊女の部屋を詠む場合、他にも分かりやすいアイテムがあったはず。鏡とか、着物とか、煙草とか……」「人工的に着飾った遊女と、本来は野に咲くべき菫との取り合わせにハッとさせられます」

〈捨團扇遊女の顔のあはれなり〉。夏井さんは「夏が過ぎれば無用の長物となる団扇。それを商品価値の薄くなってきた遊女と重ねて、さらにまた〈あはれなり〉と最後に畳みかけている」。奥田さんは「極めて視覚的な文学である俳句に、物語性も強く漂わせるのが子規」。

〈傾城の寝顔にあつしほつれ髪〉。奥田さんは「哀切さとエロティシズムが同居」と感じた。「妄想力」と自ら言う奥田さんの鑑賞の数々に、夏井さんは「奥田ワールド！　遊女の儚さを感じさせる解釈だなあ」。

奥田さんの言葉が心に響く。「思えば俳句は、流れ移ろう心を切り取って十七音にのせる、『魂の写生』なのかもしれない」

（俳壇担当　西秀治）

馬場あき子選

藤井聡太「もっと実力が必要」と自をいましめて八冠になる　（川崎市）小林　冬海

終盤に一瞬ミスせし永瀬王座顔は険しく身を捩りたり　（三鷹市）坂本　永吉

木耳のぞつくり生えて仰天す庭の銀杏の枯木切株　（前橋市）荻原　葉月

ガラス戸に五匹点てん亀虫めそんなきれいな緑色して　（宝塚市）寺本　節子

団塊の世代の孤独胸に秘め谷村新司昴となりぬ　（東京都）東　賢三郎

沖縄は日本に復帰し半世紀孤立無援の戦い続く　（三郷市）木村　義熙

終戦時小五のわれらに「幸せは…」橘曙覧を教えし先生　（蓮田市）斎藤　哲哉

干し草の饐えたる匂ひ肥料の香混じりて秋は牛舎を包む　（徳島市）上田由美子

ハシビロコウ微動だにせず「あなたみたい」一声にわれ動く　（袖ケ浦市）一尾　弘志

山火事を生き抜く術を知っていたヘラジカ達に木々はや芽吹き　（豊中市）澤田　和代

【評】第一首、第二首はそれぞれニュースの映像に拠っているが、いずれも深い感銘を受けたのであろう。勝敗は個々の人生のさまざまな体験を思い起こさせるであろうから。第五首は谷村新司さんへの悼歌。昴は作品名に掛けた讃辞。

佐佐木幸綱選

新蕎麦を食べに出かける奥出雲たたらの里はすぐ日が暮れる　（出雲市）塩田　直也

新しき絨毯ひろげクロールの形に動く親子の手足　（大和高田市）石塚智恵子

夕暮れの町に降り来てさがす酒舗ひとりの山の終点として　（横浜市）黒坂　明也

潮騒の浜辺に立てば処理水の放たれし沖はるけく光る　（茨城県）渡辺たかし

稲架二列静かに立てり一面に緑のひこばえ伸びたる田圃に　（明石市）竹中紀久子

一分の間に頭かきむしり頭を下げて棋士は無冠に　（八王子市）額田　浩文

酸素ボンベ引き摺り歩いて十箇月見掛けた同士は未だに一人　（川越市）西村　健児

修繕の百三十戸高層を水迸せてまづ丸洗ひ　（広島市）金田　美羽

教会を模す式場を本物の新婦の娘と腕組み歩く　（福津市）岩永　芳人

犬好きと猫好きの友眼に見えぬ火花を散らすにこにこ顔で　（前橋市）荻原　葉月

【評】第一首、新蕎麦、早い日暮れ。いよいよやってきた本格的な秋である。第二首、新しい絨毯を喜ぶ楽しそうな親子。子供はまだ幼いのだろう。第三首、ひとり登山のしめくくりは、ふもとの町の飲み屋でゆったりと飲むひとり酒である。

高野公彦選

哀しみの瞳をのせたロバの馬車ゆっくりゆっくり南へ動く　（鹿嶋市）大熊佳世子

AIも兵器も進歩したけれど太古のままに人類は野蛮　（朝霞市）岩部　博道

海を埋めミサイルを買い富士山が雪化粧する国に住みおり　（和泉市）星田　美紀

子と我のページをめくるタイミング時々シンクロする秋の夜　（奈良市）山添　聖子

人としていかに謙虚が大事かを二十一歳の棋士に教はる　（東京都）上田　国博

八冠の趣味は普通に詰め将棋昔気質の職人みたい　（甲州市）麻生　孝

甥っ子がスマホおしえに来てくれるいそいそと炊く炊きこみご飯　（彦根市）今村　佳子

ガラス窓磨き上ぐるが仕事ゆゑすまぬすまぬとメジロ葬る　（名古屋市）今出　公志

とある日の歌壇切り抜きとっておくどの歌が好きか夫は知らない　（堺市）中井　光世

数学が嫌いだけれどマイナスの二乗がプラスになるの大好き　（松山市）藤田　敦子

【評】一首目、爆撃を逃れ、ガザ地区の市民がゆっくり南へ退避する悲しい光景。二首目、人智は進化を遂げても人類の野蛮さは消えない。三首目、日本の今を端的に言えば、の歌。四首目は〈読書の秋〉の夜の静けさを見事にえがいている。

永田和宏選

時にまだ時にはもうと使ひ分け七十代は生き易きかな　（加東市）藤原　明

熱狂の人らが摑む号外にいつもどほりの藤井の笑顔　（鹿嶋市）大熊佳世子

天仰ぎ髪かき毟り失着を悔やむ永瀬の無念もドラマ　（浜松市）松井　惠

僕だって一手の読みを誤って結婚したが今は幸せ　（海南市）樋口　勉

信じれば夢は叶うと信じてた鉱石ラジオが歌ってた空　（神戸市）松本　淳一

「罪と罰」「戦争と平和」「赤と黒」シンプルだった我らの青春　（大和郡山市）四方　護

暮れてゆく秋の夕べは寂かなり人は無口で足早となる　（横浜市）滝　妙子

廃屋の門扉に絡んで実を付ける鴨上戸の鮮やかな紅　（川越市）西村　健児

ヘジャブ被ぬモハンマディ氏の顔写真に添えられている夫提供の文字（高松市）桑内　繭

偉大なる神が殺せと人に言いそれを信じる人の不可思議　（神戸市）安川　修司

【評】藤原さん、そう七十代は気の持ちよう。「まだ」がいいかな。藤井永瀬の大逆転ドラマを双方から捉えた二、三首目。それに乗っかってちゃっかり言ってしまった四首目。樋口さん、大丈夫？　鉱石ラジオと二項対立の時代を詠う五、六首目。

風信

三枝昂之著「佐佐木信綱と短歌の百年」　明治から昭和にかけて歌人・国文学者として大きな足跡を残した信綱の全貌に迫り、近代短歌史としても読める一冊。（角川書店・3300円）

第28回若山牧水賞　宮崎県など主催。京都市の歌人永田紅さん（48）の第5歌集「いま二センチ」（砂子屋書房）が選ばれた。父永田和宏さん、母河野裕子さんと共に初の親子受賞。

☆印は共選作。掲載作は記事への引用や、電子メディアやSNSへの掲載・収録をすることがあります。投稿は無地のはがき1枚に1作品、未発表の自作のみ。作品の横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104・8661　晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。二重投稿は不可。選者が添削する場合があります。